

プラトーン 哲學資料論

——プラトーンに於ける哲學的精神の發展序説——

三 井 浩

この小篇は副題が示してゐる様に、「プラトーンに於ける哲學的精神の發展」を探求するに際し、謂はゞその準備工作として企てられた序説の一部分（序説第二）であり、序説第一「哲人研究の意義と態度」第三「プラトーンと古代世界」と相待つて序説の三部作をなすものである。従つて序説第一を豫想してゐることを諒せられ度い。「故に」を以つて始つてゐるのはそのためである。）

(一) 資料論の課題と出發

故に我々は汝々として玲瓏なるギリシヤ語を修めつゝ、専心プラトーンの著作を熟讀玩味し、その哲學的精神を聞くことに努力しなければならない。さて今我々の手にあるプラトーン著作集は英獨佛の學者の校訂に成れるものである。即ちバーネット校本（オクスフォード版）、ヘルマン・ウォールラフ校本（トイブネル版）、フランス諸大學編本（ビュデ版）である。^{*}

* シュタルバウム校本、シャント校本等も善本とされてゐる。（然し私には未見の書である）。

猶歴史的意義を有する諸編本のうちステパノス編本（Stephanos: *Platonis Opera*, 3 voll. 1579. 廣島文理大所藏）は周知の如

くその頁付によつてプラトーン言葉が引用さるゝ慣習の故に、特に掲ぐる必要があらう。この本は三巻より成るが故に嚴密には S I, II, III. を冠して他本と對照さるゝ。只その編次が四部集典（後出）の順序と異つてゐるのは不便であるが今更變更もできない憾みがある。

論述の便宜上その目錄をバーネット本によつて次に掲げておかう。（二一頁）

此の著作集の中には古代からの傳承（後述）によつて已に「僞典」として附録に貶くだされてゐる一群がある。然らば此處に眞作として四部集典中に編輯されてゐるものはすべて本當にプラトーンの眞作であらうかといふ疑ひが自ら起らざるを得ない。プラトーンを敬愛し眞のプラトーンに見えんとする者は自ら斯くの如き疑惑に——その研究の途上に於て——逢着するのである。この疑ひは古代以降多くの人々によつて起されてゐるのみならず、或る著作は僞作視さへされてゐる。否何人によつてもその眞作性を疑はれなかつたものは極めて僅少である。即ち「プロークラス」「パイドロス」「饗宴」「ゴルギアス」「テアイテトス」の五篇（または此等及び「パイドーン」「國家」の七篇、註を見よ）にすぎない。従つて其のいづれを眞作とし、僞作とするかによつて、たとひ個々の著作の解釋については一致しても、それ／＼異つたプラトーンが現出する。勿論前世紀後半以來の英獨の學者の研究によつて可成の程度まで意見の一致を見ることができた。然し今なほ完全の一致には達してゐない。のみならず重要な著作については一致が見出されたと言はるゝ場合にも、なほ眞作性の程度といふことが考へられなければならない。大體の一致を主張する泰西の多くの學者はこの程度性を考へてゐないとおもふ。個々の著作の確實性の程度に應じて重點の置き場が自ら異つて來なければならぬ。即ち確實性の程度の低い著作を中心にしてプラトーン哲學を説くことは危険である。さうして問

プラトーン 著作集 目録

四部集典第一

エウテュプローン〔一・五〕
ソークラテースの辯明〔一七・五〕
クリトーン〔九〕
バイドーン〔四七〕

四部集典第二

クラテュロス〔四〇〕
テアイテートス〔五一〕
ソピステース〔四三〕
ポリーテイコス〔四一・五〕

四部集典第三

バルメニデーヌ〔二七〕
ピレীবোস〔四六〕
饗宴〔三五〕
バイドロス〔三六・五〕

四部集典第四

アルキビアデーヌ〔第一〕〔二九〕
アルキビアデーヌ第二〔一〇・五〕
ヒツパルコス〔六〕
愛者たち〔六・五〕

四部集典第五

テアゲーヌス〔八〕
カルミデーヌス〔一九〕
ラケーヌス〔一七〕
リュースイス〔一三〕

四部集典第六

エウテュデーモス〔二六〕
プロータゴラーヌス〔三五〕
ゴルギアース〔五九〕
メノーン〔三三〕

四部集典第七

大ヒツピアース〔一九〕
小ヒツピアース〔九〕
イオーン〔八〕
メネクセノス〔一〇〕

四部集典第八

クレイトポーン〔三三〕
國家〔二〇五〕
テイーマイオス〔四八〕
クリテイアース〔一〇〕

四部集典第九

ミノース〔六・五〕
法律〔一一〕
エビノミス〔一一〕
書簡集〔十三通〕〔三三・五〕

*
定義集〔五〕

偽典〔二七〕

正について
正について
徳について
デーモドコス
シシュボス
エリユクシアス
アクシオコス

* ヘルマン本の書簡第十四―第十八は他所より附加せられたるもの、プラトーンの寫本中にはなし。〔〕 筆者。〔〕 内の數字はバーネット本による枚数を示す。著作の大小は必ずしもその價值を定めなければならないけれども、三枚の「クレイトポーン」が偽作とされるのと二〇五枚の「國家」が偽作とされるのとは單に大きさの上からだけでも重大な相違があるから、便宜のために書きそへて見た。

題は單に眞僞論の範圍内では解決されず自ら時順論に及び、また其に關聯して著作の時順とプラトーンの哲學的精神の發展との關係が問題となり、更に著作の資料的價值（プラトーン哲學を知るための）其ものが考慮されなければならなくなり、ひいてはアカデーメイアの學園に於ける彼の講義、所謂「アックスドグマ不文の教説」（アリストテレス、彼の弟子、註釋家の報告にもとづく）と稱せらるゝもの、一般にプラトーンについてのアリストテレスの關説、古代のプラトーン諸傳（一般にプラトーン傳の資料）等を吟味しなければならなくなつて來る。此等の問題を順次に考察し、本論に入る準備として暫定的結論をつけておかうとするのが此の資料論の課題である。

* 上掲目錄中の「僞典」「定義集」のほかに古代人によつて僞作視されたものは諸家の研究によれば次の如くである。「エビノミス」「アルキビアデース第二」「エラストイ」「ヒツパルコス」（以上の出典は Zeller II 14 S. 441, 1）。「書簡集」「ノモイ」「國家」（此の三者及び「エビノミス」を僞作とするは古代末期のプロトコス。Proleg. 26. Hermanns Platonis Opera VI S. 219, 17ff.）ストアのパナイティオス（前一八五——一〇）が「バイドーン」を僞作視したといふ報告は報告者の誤解に基くとされる（ツェラー同上處以來）。また上述プロトコスの「書簡集」「ノモイ」「國家」僞作視も誤解とされる。（ツェラー同書四七四頁）。さうすれば何人によつても僞作視されなかつたものは「國家」「バイドーン」を加へて七篇となる。

私は先づ眞僞問題に於ける最も著しい例を取り上げることから我々の考察を始めよう。シェリングは「テイマイオス」を僞作とした。その理由は無秩序なる質料が神によつて秩序をうるといふ思想がそのなかに説かれてゐるが、それは「哲學の父」なるプラトーンにはふさはしからぬ考へであるといふにある。「眞の哲學の主領にして父なるもの」が此の理説の創成者とされた——さうして彼の名が汚された」のである。（Schelling: Philosophie u. Religion, 1804, S. 32）。然るに一八〇九年の「人間自由の本質についでの研究」に於ては眞作と見做してゐる。（哲學文庫版四六

頁註六二頁參照)。此の變化は何によるのであらうか。其處には墮落の根據をつきとめんとしたシェリング自身の哲學上の發展とともに歴史的研究所の力が無ければならない。然らざればそれは體系家シェリングの放膽なる獨斷にすぎない。そのプラトーンはシェリングの變化に全然從屬するシェリングの影法師にすぎない。其處には優れたフィロログ・ボエタの證明の壓力があつたのである。故に我々は根本的な態度を堅持するともに、他面何處までもフィロログとしての研究を進めなければならない。否、プラトーンを敬愛する態度、已れを虚うして客觀的たらんとする態度が自ら我々を驅つてギリシヤ語を學ばしめ、フィロロギー的研究に導くのである。もとより歴史的研究所は對象への愛に貫かれてゐなければならぬ。本末は絶対に顛倒さるゝ事を許さない。

もとより現代西洋の世評高き學者の結論に従ふことを以つて満足する態度も可能である。然しさういふ態度をとる場合にもその結論が如何にして生まれて來たものであるかを充分に吟味しなければ、西洋の新學說を次々に盲目的に追ひかけるか、或ひは二三の流行學者の說を無批判に木に竹を接ぐやうに混合するか、いづれかの結果に陥らざる得ないであらう。諸々の異說を取捨選擇しようとするならば、彼等の考へ來つた道をもう一度我々自らの問題として歩いて見なければならぬ。彼等がそのなかにあつて研究してゐる傳統の源泉をつきとめなければならぬ。さうして、單なる折衷混合的博識ではなく、一定の規準に基いての批判的綜合を求めなければならない。かくして始めて我の將來の研究をして單なる模倣或ひは混合の域を脱せしむる基礎を築くことが出来るであらう。

(二) グローットの傳承主義とツェルレルの批判主義

それでは歴史的に眞偽を決定すべき規準は何處にあるか。それは先づ傳承であらう。然し傳承への懷疑に我々の研究の發足があつたのである。もとより傳承を歴史的研究によつて再認することは可能である。此の道を選らんだのが英國のグロートであつた。(Frohe: Plato and the other companions of Socrates. vol. III 1895)

グロートは最早舊いかも知れない。然し彼の入念なる大著三卷は數多き過去のプラトーン研究書のうちひとりなほ有益なるものとして残るものであり (Robin: Platon, 1935. p. 342)、英國プラトーン研究の基石でありまたその代表である。英國プラトーン研究は一般的に傳承尊重的である。グロートの的である。(傳承を批判的研究によつて再認することは必ずしも傳承尊重的ではない。批判に耐へぬ傳承は否定されるであらうから。然しグロートやテイラーの態度は批判に先立つて既に傳承を尊重してゐる。批判によつて疑ふべからざるものを確立せんとすることよりはむしろ歴史的研究によつて能ふ限り傳承を是認せんとすることに彼等の努力は注がれてゐる。其態度は嚴密ではないが着實である。) テイラーはその著 Plato The man and his work 1926 の序文に於て「私が自分の前においてゐた手本はソクラテスの仲間達についてのグロートの偉大なる著作である」と言つてゐる。其他その實例は擧ぐるにたへない。例へばプラトーンの「書簡集」に對する英獨兩國學者の相違を見よ、英國ではグロートを始めとして傳的に眞作とし、ドイツは批判的であつてザイラモヴィツツ (Platon II? 1919 S. 28) が第七、八、九、書簡を眞作とするに至るまではツェラーを始め多くの學者は僞作としてゐたのである。(書簡集については後述)。更にまた「ソクラテスの辯明」はその實質に於てソクラテスの實際の辯明であるとするグロートを「ニーネットは同篇註釋に於て稱讚し、これを否認するドイツ流のシヤンツに對し」「グロートの判斷は何時もながらはるかに健全である」と言つてゐる。實際ドイツでは「アポロギア」を僞作とした學者 (Ast: Platons Leben und Schriften, 1816. S. 477 ff.) もゐるたゞである。ドイツの學者は後に「書簡集」に於けると同じく「アポロギア」についてもその説を改めた (Wilamowitz: op. cit. II S. 50 ff.)。『アポロギア』については「本論」參照) 其他兩者の態度の相違を我々のこれからの所説が自ら示して行くであらう。

それでは我々の當面の問題である眞僞論についてのグロートの傳承承認の態度は如何。グロートはシュライエルマッヘル（一八〇四）以降の批判的研究によつて傳承の或る部分を否認するよりはむしろ傳承全部を承認する方がより安全なより哲學的な處置であると考へ、傳承上眞作とされてゐる全著作によつてプラトーン説を述べようとする。（*Op. cit.*, I, p. 206）即ち彼は上掲プラトーン著作集目錄中の四部集全部を眞作と認めるのである。所でこれ等の著作の眞作性を承認して、それを四部集典の形に編纂出版したものはディオゲネス・ラエルティオス（III, 56f.）によればトラスヌルロスである。故に眞僞問題上傳承に従ふとはトラスヌルロスに従ふことにほかならない。然しトラスヌルロスに従ふためにはトラスヌルロスに至るまでの傳承の正しさが證明されなければならぬ。此のトラスヌルロスは普通テイベリウス時代（後一四一三七）の修辭家トラスヌルロスであるとせらるゝ。故にグロートは前四世紀のプラトーンから紀元頃のトラスヌルロスに至るまでプラトーンの著作の眞作性が誤りなく傳へられたことを論證しようとする²⁹。

* これはグロート時代の通説、此のトラスヌルロス以前に己に同名異人のトラスヌルロスまたはデルキュリデスによつて四部集典の形に編纂されてゐたと Varro, *de lingua Latina* vii, 88. 下基として考へらるゝ點にひびく Sussehnrl, "Über Thrasyllos zu Laert. Diog. III 52-6;" in *Philologos* LIV (1895), 567. Taylor, *op. cit.* p. II. 参照。

グロートは次の如く説く。

プラトーンはその逝去に先立つ三十八年間（シラクサへの短い二回の旅を除いて）をアテーナイの郊外のアカデーメイアに定住して著作者、講義者として過した。彼の主なる弟子特にスペウシッポス（甥）やクセノクラテースは何時も

その場所に彼と一緒におゐた。プラトーンの死後スペウシッポスがプラトーンに代つて學頭となり、爾來クセノクラテース、ポレモン、クランツール其他の人々が中斷なくその跡をついだ。彼等は必ずプラトーン自身の手稿本を偉大な創立者の尊き記念として、注意深く學園に保存したにちがひない。さうしてプラトーンの著作の眞偽性や原典について教へを求めようとする者には著者の手稿本（もしくは筆記本）によつて答へを與へることができたに違ひない。ところでプラトーン寫本に關する事件のうち、その報告が現に保存されてゐる最古のものは「グラマテイコス・アリストパネース（ビニューザンティン生れの）等がプラトーンの對話篇を三部集典に編纂した」(D. L. III. 61.)といふことである。此のアリストパネースは紀元前二〇〇年頃にアレキサンドリアの圖書館に於ける秀れた圖書管理官であつた。アレキサンドリア圖書館はプトレマイウス二世時代(前二八五—二四七)に始めて名聲を得たがその建設はプトレマイウス一世時代(前三〇六—二八五)に溯りうる。さうしてその建設に際して指導的役割を演じたのは有名なパレロンのデーメトリオス(前三四七—二八三)であつた。彼は地位高きアテーナイ市民として十年間アテーナイに居り、三〇七年亡命後主としてアレキサンドリアでプトレマイウス一世に仕へた。デーメトリオスは一方に於ては政治的才幹をも具へてをり、その勢力を利用してアカデーミアの學頭クセノクラテース、アリストテレス學派の學頭テオプラストス等と親交を結び、また彼等を保護した。従つて彼はプラトーンの手稿本の寫しをアカデーミアから手に入れることができたか或ひは少くとも他處より買求めた寫本の眞偽については學頭からの報告によつて誤りなきを得たに違ひない。アレキサンドリア圖書館に於けるデーメトリオスの仕事は其後カリマコス、エラトステネス、アポロニウス、アリストパネース等それ／＼高名な學者たちによつて順次に後繼された。彼等も亦プラトーン著作の眞偽問

題については當時のアカデミーの學頭に問ひたゞすことができた筈である。従つてカリマコス、アリストパネー
 ス等の時代にはアレキサンドリア圖書館にプラトーンの著作(寫本)が純粹に完全に存在してゐたに相違ないと考へら
 れる。遺憾なことにはディオゲネス、ラエルテイオスはアリストパネース等のプラトーン眞作目録を全部掲げてゐな
 い。彼は只上引の言葉に續けて、彼等は三部集典第一に「國家」「テイマイオス」「クリティアス」第二に「ソピステ
 ース」「ポリテイコス」「クラテュロス」第三に「法律」「ミノス」「エビノミス」第四に「デアイテートス」「エウテ
 ユプローン」「辨明」第五に「クリトーン」「パイドーシ」「書簡集」を入れ、其他の著作は一つづゝ無秩序に並べた。
 と語つてゐるにすぎない。然しトラスユルロスは眞偽問題についてはアレキサンドリア圖書館並びにアリストパネー
 スに従つたに違ひないと考へられる。それは雙方の目録を較べて見ても大體推定されうることであり、またトラスユ
 ルロスがアリストパネースの目録中に無いものを眞作として採り入れたと考へうる様な證據は一つも見出されないか
 らである。故に我々は彼の眞作目録に充分に信頼して差支へ無い(同書一三二—一六九頁)。

トラスユルロスの眞作目録は十八世紀の末まで大體に於て眞偽問題の權威として承認されてゐた。勿論四部集典の形は無視さ
 れ、對話篇の順序は變へられ、其上「クレイトポーン」と「エビノミス」については疑念がさしはさまれた。(グロートはかう云
 つてゐるが、今日では「クレイトポーン」は古代人によつて疑はれなかつたことになつてゐる。猶上註を見よ)。然し積弊的には
 何一つトラスユルロスの目録に附加されず、またそれから取除かれはしなかつた。古代末期の新プラトーン學派も十五世後半のフ
 イチノも眞偽問題についてはトラスユルロス目録に従つた。(プロクロスの偽作説については上註を見よ)。近世に入つてもセラヌ
 ス(一五七八)バトリチ(一五九一)更に有名な哲學家テンネマン(System der Platonischen Philosophie 4 Bde 1792-95)等
 もプラトーン著作の時順は問題にしたが眞偽問題にはふれてゐない。シユライハママン(Platos Werke 1804-1828. III Th.

in6 Bde) に至つて始めて批判的研究が現はれたのであつた。此のシュライエルマツヘルよりアスト(一八一六上掲書)ゾヘル(以下書名省略一八二〇)シュタルバウム(一八二七)H・リツテル(一八三六一三八)ヘルマン(一八三九)ゾーウ(一八五五)ヌシク(一八五六)ゾーゼミール(一八五五—五七—六〇)を経てユールベルグエク(一八六一)に至るドイツの批判的研究があまりにも破壊的であるに抗してグロートは上述の如き傳承擁護の態度に出たのであつた。彼等に對するグロートの反駁。(同書一七〇—二二一)。事實この破壊的傾向はグロート初版本の翌年に出たシャルシュミット② Die Samml. ng. d. plat. Schriften, zur Scheidung der echten von unechten untersucht, 1866. に至つて絶頂に達した。彼はプラトーンの三十五著作のうち僅かに九編を除き他を悉く偽作もしくは疑作としたのであつた。即ち「パルメニデース」「ソピステース」「ポリテイコス」のみならず「ピレポス」等をも偽作とした。(cf. Lutoslawski: Origin and Growth of Plato's Logic 1897. p. 56. 及びツェラー處々)

シュライエルマツヘルが偽作となしたものの十二篇。それは眞偽論の母胎であり、且つ今日なほその價値を失つてゐないと考へらる。今その歴史的當體的意義の重要性をおもひ特に掲出しておくことにしよう。「ヒツパルコス」「アルキピアデース第二」「エラストイ」「エビノミス」(以上古代人も。二二頁註)「ミノス」「テアゲース」「クレイトポーン」「大ヒツピアス」「小ヒツピアス」「アルキピアデース第一」「イオーン」「メネクセノス」。

然しグロートのトラスユルロス擁護に對して十年後ツェルレルは次の如く反駁した(三版一八七五年三八七頁以下)。

グロートの證明は幾つかの不確實な前提に基いてゐる。プラトーンの全著作の原本もしくはその著者によつて用ゐられてゐた寫本がアカデーメイアに保管されたといふことは事實かも知れない(それについては歴史的傳承は我々に何ごとも告げてゐないけれども)。然したとひ其れが事實であつたにせよ、プラトーンの直弟子のみならずその弟子の後繼者たちまでが、プラトーンの作らしく思へるが彼等のプラトーン集のなかには入つてゐない書物を、すべて斷乎として斥けることができた程、彼等のプラトーン集の完全さを固く確信しまたその純粹さを厳しく監視してゐたと

いふことを誰が保證するか。アカデミー學園所有のプラトーン著作集がプラトーンの眞作によつて補はれ得た様な場合が實際考へられうるといふ點をしばらく措くとしても。(例へばプラトーンの書簡が本當に存在したとするならばその原本はプラトーンの遺著中には無つたに違ひない。またシベウシッポスやクセノクラテースの文庫が災禍を蒙つたやうな場合——さういふことはアテーナイ占有をを目指す後繼者^{ディナキ}戰役(前三二一—三〇一)中には容易に起り得たであらう——さういふ場合は他處から補つて來なければならなかつたであらう。)更に假りにアテーナイのアカデミケルが事實連續的に如何なる僞作をもその文庫に受け容れなかつたと假定しても、アレキサンドリアの圖書管理官も亦さういふことはしなかつたといふ想定を何が權利づけるのか。前の假定が正しいなら彼等はアテーナイで其處ではどの著作が眞作とされてゐるかといふことを學ぶことができたのであらう。然し彼等が實際にさういふ事を行つたといふことを我々は何處から知るのか。我々はそれに對してはいささかの保證も有してはゐない。我々はむしろ著作の僞造が、アレキサンドリアやペルガモンではそれを高い價格で買ひ取つたために、大いに鼓舞されてゐたこと、さうして特にアリストテレースに對して數多くの著作が僞造された(プロクレータス二世に賣るために)ことを聞くのである。さうして若し其上アリストテレース以後の時代の文獻批判の状態を考慮に入れるならば、我々はアレキサンドリアの學者たちが一般に、著明な作者名を戴く諸著作の眞僞性を、グロートが信じた様に入念にまた慎重に吟味したと想定すべきいかなる理由も有しないのである。

*「アレキサンドリアやペルガモンの王たちが書物の所有に熱心になるまでは書物は決して僞造されなかつた。然るに先人の書物を王たちの許に齎す人々が報酬を受け始める様になつて以來、人々は多くの書物を僞造して持つて行く様になつた。」(Galien.

in Hippocr. de nat. hom. I 4; XV 105 K. シンブリキオスのアリストテレース註譯にも類似した言葉がある。ガレーノスが此處で二大圖書館建設以前には書物の偽造は全然存在しなかつたと考へてゐるならば、それは明かに行きすぎである。

それ故にアリストパネスやトラヌルロスの目録は差し當り、そのうちに含まれてゐる著作が此等のグラマテイクスの時代にプラトーンのであると思はれてゐたことを證するにすぎない。然し事實またさうで有つたか否かといふことは批判の一般的規則に従ひ個々の著作の研究によつて決定されなければならない。

ツェラーの書物は最早舊いかも知れない。然しそれは「あらゆる研究が其處から出發しなければならない書物である」と Hoffman は力説してゐる。殊に全體に互る資料並びに文獻の批判的集成に於ては今なほこれに比肩しうるものは見出されぬ。英國のグロートに對する者はドイツに於てはツェラーである。また實際上述のツェラーの反駁は力のあるもの、根據のあるものと云はねばならぬ。

(三) 批判と傳承

それ故に我々は改めて問ふ。個々の著作の眞僞を決すべき規準は何であるかと。それは先づ古代人の證言であらう、就中アリストテレースの著作こそまさにそれであらう。然しアリストテレースの著作の眞僞自身が既に問題ではないか。(僞作の定説がある「宇宙について」に「法律」が引用してあつても、それは證據にはならない。) 其についてもプラトーンの場合と同じ問題が起り同じ手續が要求されるであらう。斯くして我々の研究は無限の媒介を餘儀なくされる。プラトーンといふ人が實際にゐたかといふ疑問にさへも我々は明確に答へることができない。然しそれは當然である。私が嚴正なる批判的態度を持する時、私は私の眼前にあるものをさへ眞に在ると云ふことはできない。

私はデカルトの出発點に立つてゐる。否さういふことすら既にデカルトについての我々の歴史的認識の正しさを前提してゐるのである。我々はその權威を定めて、それに従ふべきか。然しそれは我々の抜け出て來た所に歸へることにすぎない。二三の權威を折衷混合するか。然し何を規準として取捨するのか。我々の研究には核心がなければならぬ。資料論とさふ様な研究に於てもまた我々は *Wer Stellung zum Leben nehmen will, muss selbst feststehen auf einem absoluten Standpunkt. (Haken)* と云はねばならぬ。私は自らに問はう。「お前は何のためにプラトーンを研究するのか」と(序説第一参照)。かくして私は私の問題を次の如く改める。「ソークラテースといふ主役をもつ國家篇の作者とせらるゝプラトーンといふ人は他に如何なる著作を書き残したか。また何時、如何なる國に於て、如何なる生き方をした人であるか」、さうして更に「その主役のソークラテースといふ人物は實在した人であるか。然りとすればその生と死とは如何」と。(それ故にもしも「パルメニデース」「ソピステース」「ポリテイユス」「エウテュデーモス」等の著作がプラトーンの眞作であつて、「國家」「辯明」「饗宴」「パイドーン」「テアイテトス」等が僞作であるといふならば、私はむしろ僞作の作者を求めて、研究の對象をかへるであらう。) この問ひを核心として、無限の媒介(それは即ち私の無知といふことの異名にすぎない)のなかに於て私は私の現在にできうる限りの答へを見出さなければならぬ。その現在の私は全體の媒介によつてあるものである。何處より來るとも知れぬ者によつて、斯くあるのであり、斯かる知をもち、かゝるものを見るのである。私の今の研究さへもまた無數のものへの信頼の上に立つてゐるのである。限定することのできない傳承の上に立つてゐる。然かも私は私に許さるゝ限り批判的でないればならぬ。私は何時も徹底的批判の無知と無限の傳承の全知との間にあつて正と誤との自由に於て無限の努力を

盡くさなければならぬ。

西洋の學者の校訂になるプラトーン著作集を我々は讀む。然し彼等はそれを何から編輯したか。それは古寫本による。今の私は古寫本を見ることができない。今の私はこれ／＼の古寫本に斯くあると彼等が云ふとき、私はその言に信頼しなければならぬ。(彼等はその際誤ることもある。例へばバーネットのテキストについてさへもさう云はれてゐる。) それではその寫本は如何なるものであり、何時頃のものかとされるか。私は彼等の研究に信頼してその重なるものを掲げることにする。(略號學者間に異同あり。)

諸 寫 本

羊 皮 紙 本 重なるもの

- B. Cod. Bodleianus, MS. E. D. Clarke 30.
 T. Cod. Venetus Append. class. 4, Cod. 1.
 W. Cod. Vindobonensis 54, suppl. phil. Gr. 7.
- A. Parisinus graecus 1807.
 M. Malestianus, Plut. xxviii. 4.
 D. Venetus 185.
-
- B. Oxford の文庫名により Bodleianus と呼ばれ、また発見者 E. D. Clarke (Patmos 島で発見) の名により Clarkianus と呼ばれる。895年 (Burnet) の寫本、896年 (Jowett)。
- T. 地名により Venetus と呼ばれ、またその地の San Marco 文庫により Marianus と呼ばれる。現存プラトーン寫本大部分の原本、ステファノスの原典も同じ源泉に遡る。B以上古い傳承を示してゐる。10世紀から12世紀頃の間に互つて學者に異論あり。
- W. 地名により Vindobonensis と呼ばれる。B. T. とは獨立の傳承、次のAに由來する故、Aの缺損部分を代表しうる。12世紀頃のもの。然し Berlin Papyrus からの Theaetes tos 無名氏註釋の発見はWが非常に古い傳統を代表してゐることを確定したとされる。
- B. T. W. は四部集第一より第七までをふくむ。
-
- A. Paris の國立圖書館にちなみ Parisinus と呼ばれる。9世紀のもの、最古の寫本(羊皮紙本中)。
- M. Cesena の圖書館名により Malestianus と呼ばれる。12,3世紀。
- D. 地名により Venetus と呼ばれる、12世紀。
- A. は 四部集第八、九、定義集、僞典をふくむ。
- MD. は 第八、九、をふくむ。

此等の古寫本によつて校訂編纂せられたプラトーンの著作の眞偽が問題にせられてゐるのであるが、然し他面これだけでプラトーンの著作全部であるかとの疑ひも起るであらう。實際古代の著作は名のみ傳つて實質は散佚してつたものが無数にある。例へばデーモクリトスの著作は六十編と傳へらるゝが全部散佚し僅に斷片が残つてゐるにすぎない。プラトーンについては現代の西洋の學者は「彼はその全著作が我々に傳はつてゐる稀な人の一人である」(ロバソ上掲書一九頁)、「我々は古代の如何なる文書中に於ても、我々が未だ所有してゐないプラトーンの著作への言及に出逢はない」(テイラー上掲書一〇頁)と云つてゐる。

パピロス本斷片

- (1) Papyrus Arsioitica
 (2) Papyrus Oxyrynchus. n° 1016
 (3) " " n° 1017

(1) は Platon 死後一世紀間に書かれたもの。出版者名により Flinders Petri Papyri と呼ばれる。Laches と Phaidon との斷片をふくむ。1891-1893. 書換、註釋、索引を附して H. Mahaffy 出版。

(2) は1906年土地購買證書の裏面に見出されたもの、A. D. 3世紀前半期のもの、Phaidros の巻頭より 230E4 までを完全な状態でふくみ、すぐれた讀みが見出される。

(3) は (2) と同時發見、2世紀後半期のもの、同じく Phaidros 238C6-25163 までをふくむ(但し大きな空隙理解し難い部分がある)。

(2) と (3) とは Grenfell と Hunt とによつて編纂された Oxythynchus Papyri の第七卷(1910) にふくまる。

(4) (5) 猶その五卷(1908年)には Symposium 斷片(200E-213E, 217B-終り)六卷(1908年)には Lysis 208C-Euthydemos 301C がふくまれてゐる。

かくパピロス斷片は年代は非常に古いけれども、當時の廉價流布本であつて、細密な刊本から寫された現存の羊皮紙本よりは資料的價值ははるかにひくいと思へられる。(Burnet: Plato Phaedo ix)

然し (2) について述べた如くすぐれた讀みも屢々見出されるのであつて、例へば Phaidros 245C5 の諸羊皮紙本の ἀεὺδύνητον (常動者) よりは Papyrus 本の ἀρροαίνητον (自動者) の方が明かによいと考へらるゝ (Robin, Ritter 等も後者を採用してゐる)。

尤も嚴密に云へば古代に於て異口同音に僞作とされてゐた九篇の對話篇(D・L・三卷六二、アルキュオンを別にして)のうち五篇は傳はつてゐない。(また逆に、我々に傳つてゐる僞典「正について」「徳について」はD・Lの同所には上げられてゐない)。然し此等の著作は僞作と考へて差支へない。

またアリストテレスがプラトーンの「分割」(Gen. et corr. II 3. 330b 15. etc.) または單に「書かれた分割」(Part. anim. I, 2. 612 b 10)と云つてゐるものがあるが、前者は恐らくプラトーンの現存著作またはアカデーメイアの口述を指し、後者はプラトーンの口述に基いて他人が書いたもの、もしくはプラトーンとは關係なき著作と考へられる。然しなほ考ふべきであらう。其他哲學と直接には關係ないがプラトーンの哲學への出發に關係ある彼の少年時代の詩作は敘事詩の短かい斷片以外には傳はらない。この點については本論の少年時代に於て述べる。また彼の名を冠して傳へらるゝネピグラム(上述敘事詩斷片とともにベルク希臘敘情詩集第二卷所收)については Wilamowitz I² S. S. 362, 450nt, 457, 644. 参照。

我々は、大體に於てプラトーンの著作を全部所有してゐると考へて差支へないであらう。

四 基本著作の確立と人間の時間性

我々は眞僞論に立歸へる。傳承だけによつて眞僞を決定することはできなかつた。さうして先づ第一の規準としてアリストテレスの著作を求めた。それでは私の研究の核心である「ポリテイア」篇は如何。それはアリストテレスの眞作とせらるゝ Polit. II, 1-4 に於てプラトーンの作とせられてゐるのみならず、幾多の箇所にて證據立てられてゐる。(cf. Aristotelis Opera. editio Acaulonia Regia. Berussica V. 1870. Index Aristotelens editio Bonitz. S. 598 *Itáruw*) それではそのアリストテレスの著作によつて「ポリテイア」以外の著作の眞作性を確めうるであ

らう。然し問題はさう容易ではないのである。我々は次の場合を區別しなければならぬ。

プラトーンの名と共著作名と共に擧げてゐる場合(a)。著作名(我々のプラトーン著作集中にある)のみが上げられ、プラトーンの名が無い場合(b)。プラトーンの名のみ上げられ、著作名なき場合、然し我々はその内容を我々の有する著作のなかに見出す場合(c)。人名も著作名もないが、*πατρι, οὐνορα, νοητικῶν τινῶν*「彼等は云ふ」「彼等は思ふ」「或る人々は考へる」等の表現があり、その内容が我々の有するプラトーンの著作に符合すると考へらるゝ場合(d)。以上(a)以下の略號はボーンニツツの索引に用ゐてあるものである。猶プラトーンの著作名とソークラテースの名とが上げられてゐる場合がある。例へば「パイドーンに於けるソークラテース」(*ἑὶ τὸν Πλάτωνα Σοκράτην*)の如き。これは(a)に屬す。ボーンニツツ(註)。此の場合もプラトーンの作と見てよい。何故なら(1)他の場所で彼が明白にプラトーン作としてゐるものについても此の表現を用ゐるから、また(2)ソークラテース以外の人についても此の表現を用ゐるから、例へば「エロース論のなかでアリストパネースが」と云つてゐるのは内容上プラトーンの「饗宴」のアリストパネースを指してゐる。それ故(a)は勿論(註)も確實にプラトーンの著作を指してゐると云へる。(b)については著作名が同じで著者がプラトーン以外の人の場合も考へられぬことはないが、然し、アリストテレースが著者名を上げてゐないのは、讀者に熟知であつて著者の名が誤まられるおそれがないためで、プラトーンの著作以外にも「イーリアス」、「オデュッセイア」の如き高名なもの、ソポクレースやエウリピデースの悲劇も作者名なしで上げられてゐる。其故(b)も大體プラトーン作を指してゐると考へてよい。(c)は口述を指すことも可能である故に慎重を要する。アリストテレースの述べてゐる内容とプラトーンの著作の内容との符合の性質、程度、等を考慮しなければならず、またその際の「言」といふ文字の文法上の時制も關係する。現在ならば著作と見てよく、完了も大體さう云へる。未完了、アオリストの場合は大體口述と考へらるゝが然し著作時の行爲を指すものと解すれば著作に由來するとも考へらるゝ。(d)はそれだけでは不確實と云はねばならない。(以上 Zeller: op. cit. S. 48 ff. 參照)。我々は上掲ボーンニツツのアリストテレース索引によつて各著作の(a)(b)(c)(d)を知ることができる。然し(c)(d)は人によつて必ずしも一致しないであらう。今ボーンニツツにより(a)(b)をふくむ著作を上げると「テイマイオス」ab

c d (テイマイオスへの言及最多)。「ポリテイア」「ノモイ」 a b c d。「パイドーン」 a b d。「パイドロス」 b c。「小ヒツピアス」 b d。「メノーン」 b c (γ)。オルギアス b d。猶「スエムボシオン」も上述アリストパネースの箇所により b に入れうるであらう。(Σはプラトーンの代りにソークラテースの名が上げられてゐる場合を指す)。

我々はかくて「國家」「テイマイオス」「法律」「パイドーン」の四作は傳承とアリストテレースの證言とによつてその眞作性を確信してよいであらう。また「パイドロス」「饗宴」「メノーン」「オルギアス」「小ヒツピアス」も大體さう信じてよいであらう。

c d は慎重を要するが「テアイテートス」「ピレーボス」の c d。プロータゴラスの c (γ) d 「アポロギア」 d は確實とし、「ソピステース」の c d、「ポリテイコス」「クラテュロス」の d は確實らしいといふ程度とし、「エウテュデーモス」の c (γ) には異論があらう。それでは「アリストテレース」の證言なきものは僞作に近いと考ふべきであらうか。さうではない。

プラトーンの教育は書物よりはむしろディアレクテイケー(對話法)を重んじた。アリストテレースにとつてはプラトーンの口述の方がより根源的な資料であつたに違ひない。(我々はまた一般に古典時代のギリシャ人が文字、書物に對して一種の冷い疑惑を抱いてゐたことを考へなければならぬ。書物の尊重はむしろアリストテレース以後アレキサンドリア時代に始まると考ふべきであらう。然し今はこの點を暫くおく)。

* 猶プラトーンの講義と稱せらるゝものに關聯する種々の問題については後述する。

アリストテレースにとつてはプラトーンの著作は必ずしもプラトーン哲學の基礎的資料ではなかつた。それ故我々は彼の證言がない對話篇を僞作と見做すべきではない。

次にアリストテレス以外の古代人の證言をも考ふべきであるが、それは以下の如くであつて我々に何等新しい根據を與へない。

「ティマイオス」(クセノクラテース、テオプラストス、ティモーン、克蘭トール)「國家」(イソクラテース?、アリストクセノス)「法律」(イソクラテース?、テオプラストス、ヘルサイオス)「パイドロス」(ディカイアルコス)。以上は肯定的證言であるが、否定的證言も初めに註した如くあるわけである。それ等は前者よりは年代も新しく典據も薄弱であるが己に古代人によつて偽作視されてゐた點は參考に値するであらう。只最も年代の新しいプロクロスの「國家」「法律」偽作視もしそれが事實なら)アリストテレス及びその直後の人々の證言に叛くものであつて、全然無視して差支へないであらう。

かくて我々はアリストテレス(及びその直後の人々)の證言と我々の有する傳承とによつて眞作疑ひなしと考へらるゝ對話篇(a bに屬するもの)を基本著作とし、さうして次の如き規準を立てゝ見る。

- (一) 思想内容 (二) 藝術性 (三) 文體

基本著作と以上三點に於て強き類似性を有するものは眞作に近いと考へるのである。この規準はアリストテレス及び傳承が外的證據であるに對し内的證據と名づけうる。外的證據によつて基本著作を定めることは絶對に必要である。何故ならば、もしさうしなければ内的證據は無意味に歸するか、もしくは著名な(或ひは自己の好む)著作または先入見的プラトーン説等を基準にして他の著作を内的證據によつて批判することになるからである。上述シェリングの「ティマイオス」偽作視は即ちその極端な例である。

シェリングは自己の體系に合ふ對話篇を眞作として内的證據の(一)のみによつて他を偽作視する獨斷的態度をとつた

のであるが、内的證據全體にわたる綿密な研究を基礎としながら同じ誤りに陥る場合がある。即ち若きツェラーは今我々が基本著作の一つとしてゐる「法律」をプラトンの他の重なる著作と根本思想、目的、方法、對話の形式、言語等の點で相異するといふ七ヶ條の理由によつて、アリストテレスの證言にも拘らず、僞作としたのである。

(Zeller: *Platonische Studien*, Tübingen 1839. I. *Über den Ursprung der Schrift von den Gesetzen* S. 3-156 insb. & 12, S. 117ff.) 此れはツェラーのみではない。例へばズーコーは「バイドロス」を基本として「ポリテイコス」「クリティアス」「法律」を僞作とした (Tutolslawski, *op. cit.* p. 50)。彼等は批判的研究を行ひながら、肝腎な基本著作の批判的確立を忘れてゐたのである。(彼等の誤謬の原因はこれだけではない。其事は次に)我々は外的證據によつて確立された基本著作を基準としなければならない。基本著作間にたとひ矛盾が見出されるにせよ、一方を僞作として拒否すべき權利を有しない。グロートがドイツの内的證據による批判的研究に對して揶揄的態度を取つたのはこの意味で當然であつた。然し彼がその反動として外的證據の一つである傳承を全面的に承認する態度に出たのも對照的な誤謬であつた。基本著作は批判的に確立されなければならない。

さうしてこれを基準として内的證據によつて確實性の程度を定めなければならない。それならば、内的證據いづれかに於て基本著作と相違する作(さういふ作も多く見出される)は僞作として斥くべきであらうか。多くの學者は其を敢へてした。例へば上述せる如くシャルシュミットは所謂辯證法的對話篇「パルメニデス」「ソピステース」「ポリテイコス」のみならず「ピレーポス」始め多くの作を僞作となし、三十五篇中僅かに九篇のみを残したのである。これ程極端ではない迄も可成多くの作を同じ理由によつて僞作視する人が多い。この破壊的態度は内的證據を運用す

るに際して人間が時間的存在であるといふ自明な事實を忘却した結果である。若きツェラーたちが「法律」をさへ偽作視したのは基本著作の批判的確立をおろそかにしたためよりは、むしろこの點に其理由があつたと云ふべきである。我々は(1)基本的著作を堅持すると共に、(2)それを基準として内的證據を運用するに際しては作者が時間的存在であることを忘れてはならない。

人間は一面に於て時間的に變り行くものである。同時存在的に見れば矛盾と見える(時を包むもしくは時をふくむ同時存在と雖もそれに即して現はるゝ)。著作も一は青年の作、一は老年の作とするならば、思想内容、文體用語等上の差異から一方を偽作と見做す誤りを避けらるであらう。かくして眞僞論は自ら時順論に導かれる。プラトーンに於ける永遠なるもの不變なるものは固定したものであつてはならない。シュライエルマツヘルの教育的見地よりせるプラトーン著作時順觀(トイヒト)はアストに至つて二十一篇の僞作となつて現はれた(後掲アスト時順表を見よ)。それは時のない時順論であつた。即ち時順論は單に眞僞論から要求さるゝのみではない。その人の著作からその眞の精神を把へんとするものは著作の年代順を知らなければならぬ。

シェークスピアの有名な研究者ダウゼンは其著 Shakespeare: his mind and Art. 1875. に於て「クロノジカルに研究された著作によつてシェークスピアの精神と性格との成長を辿らんとしたが、その方法 chronological method を文學入門叢書中のシェークスピアに於て次の如く説いてゐる。「シェークスピアの作品を研究するに最も實り豊かな方法は作品をその制作年代順に見る方法である。かくして私たちは作品の起源、相互の結び付きさうして作者の精神が前途多望な初期からその豊かな成熟と實現とに向つて行くに應じての作品と精神との關係等について何もかを學ぶ。もし私たちがその制作年月を知らないとしたならば、私たち

はおそらく、どうして同じ人間が Love's Labour's Lost と King Lear との作者であり得るかを不思議に思ふであらう。年代順に見れば一方はシェイクスピアの賢い徒弟時代の手になる作であり、他方はその悲しみと經驗とをもつ壯年時代の結果であることがとわかるのである。さうして私たちは初期の劇から後期のそれへ移り行く路の少くともある部分を辿ることができる」。

哲學者を研究する際にはこの方法はなほ一層重要である。哲學的精神は常に現在の定形を超へて發展する。體系に安らふ者は既に哲學的精神を失へる者である。哲學者と言はるゝ程の者にあつては、一見無發展と見ゆる場合にも、なほ外に見えざる内への深まりとしての發展がある。(かゝる發展が實は眞の哲學的精神の發展といふべきであらう。)[序詞―哲學的精神私感]に於て述べた言葉を再び此處に語ることを私に許していただき度い。

「私が時間のうちにあるが故に私が有限であるのではない。私が一面に於て有限であるが故に私は時間のなかに現はれるのである。理性的なしかしながら有限的なる者としてわれ／＼はどこでも時間のうちに現はれなければならぬ者である。故に永遠はわれ／＼にとつては絶對の現在としてではなく、何時も無限の進歩として體驗せらるゝのである。哲學的精神は無限の努力、無限の探求として自覺せらるゝのである。かくの如き實踐的時間に於ては時間の有限無限についての思辨的アンチノミーの如き、またその形而上學的解決の如き、すべてその力を失ふのである。先後なき今としての絶對の現在、即ち永遠なるものに於ては、すべてのものは今創られ、永遠に創られてあるといふべきであらう。然しわれ／＼にとつては、理性的なしかしながら有限なわれ／＼人間にとつては、夕ありまた朝があるのである。」

プラトーンに於ける哲學的精神を感得せんとする者は彼が如何なる動機より哲學に志したか。青年時代の根本體驗

は何であつたか、何を理想とし何を夢みる若人であつたか。壯年時代には如何なる哲學を建設し如何なる仕事を自己の生涯の課題としたか。さうして晩年には如何なる境地にまで達し得られたか、如何なる遺物を後世に遺さうとしたか。その時代に對し、生國に對し、藝術に對し宗教に對し、如何なる態度をとりつゝ進んで行つたかを究めなければならぬ。其處に我々は眞の哲學的精神とは如何なるものであるかを如實に見出すであらう。然かもそのためには著作の時順が先づ定められなければならない。

ツェラーも上掲「プラトン研究」出版後七年「希臘人の哲學」第二初版（チュービンゲン一八四六）に於て「ノモイ」僞作觀を訂正し、此れを *Die spätere Form der platonischen Lehre* (S. 316-332) として述べ、フアウストの第一部と第二部、シエリングの初期の哲學と現在の哲學、フイヒテ哲學の二重の形態になぞらへてある。只ゲーテの場合は中間項の系列を絶えず辿りうるが、プラトンの場合は「ポリテイア」から「ノモイ」への過渡が缺けてゐるとする。即ち彼はプラトンを時間的に見ることによつて「ノモイ」僞作觀といふ誤を免れ得、哲學史の後版に於てはプラトンの著作の時順に多くの頁（四版七十一頁）をさいたが、その時順觀が誤つてゐたため（何故かは後述）「ポリテイア」から「ノモイ」への過渡をなす著作群を見出すことができずプラトンを充分に時間的に見る事ができずに了つた。

*然し彼は「ノモイ」が遺著であり、弟子によつて出版されたもの故、断片のまゝで残されたであらう幾多の箇所は弟子の手が入つてゐるに相違ない、またその様な跡が隨所に見されるところとして、猶自己の初説を全然破棄してはゐない。この點最終版（一八八九）に於ても變りはない。

（五）時順推定の規準と諸家の時順觀

時順論は嚴密に云へば單なる時順と制作年代との兩者をふくむ。プラトーンの著作の時順は可成の程度まで確定された。然し有力學者間になほ意見の一致を缺くものが少くない。我々は然し彼等の結論よりはむしろ如何にして此れを決定すべきものであるかを學ばなければならない。著作の時順は如何なる規準または證據によつて推定もしくは暫定さるべきであらうか。今ツェラー、プレヒテル、の哲學史及びグウデンのシエクスピア等を參考にして次の様な規準を立てて見る。

(一) 外的證據 (1) 古代の報告。(2) 同時代の文書中に於ける言及。

(二) 內的外的證據 (3) プラトーンの著作が歴史的事件又は人物に言及してゐる場合。

(4) プラトーンが文人哲學者またはその言葉思想に言及もしくは暗示してゐる場合。

(三) 內的證據 (5) 一著作の他の著作への指示。(6) 著作の思想内容。(7) 著作の藝術的構造。(8) 言語(文體統計)。

此等の證據のうち、特に著しいもののみを諸家の研究に従つて上掲番號順に順次に考へて見る。

(1) 古代の報告。アリストテレスによれば (Politica B 6, 1264 b 27)、「法律」は「國家」よりも後に書かれた。此の事は信じてよいであらう。「ノモイ」については更にディオゲネス、ラエルテイオス三卷三七に「また或る人々は、オプスのピリッポスが鐵板にあつた彼「プラトーン」の『法律』を書き寫した、と云つてゐる」とある。(同意味のこと)が Proleg. 24 25. Herminius Platonis Opera VI にも見えてゐる(實際上揭註(前頁)のツェラーも云つてゐる様に「ノモイ」には著者の最後の仕上げを受けてゐないと考へらるゝ多くの箇所が見出される。故に我々は「ノモイ」をプラトーンの遺著と考へることが出来る。

(2) 同時代の文書中に於ける言及は最も有力なものであり、シエクスピアの場合の如く觀客の日記が残つてゐるとか、或ひはギリ

シヤ悲喜劇の場合の如く上演年代の記録(例へば下のアガトンの場合の如く)が残つてゐるとかするならば、甚だ便利なわけであるが、プラトーンの著作の場合にはさう云ふものは一つも見出されない。尤もプラトーンの著作をさしてゐるのではないかと思はれるものはある。然しそれ等は不確實である。

以下を考へるにはプラトーンの外的傳記が確立されてゐなければならぬ。その詳述は本論にゆづり此處では時順論に關係ある——さうしてその年代が略々確實と考へらるゝ——事項を列擧するに止める。(下掲プラトーン著作年代表中に)。猶その典據並びにその資料的價值を此處に述べることは煩雜をきたす故最後(資料論の)に付することにする(傳記資料論)。

- (3) プラトーンPlatonの著作が歴史的事件または人物に言及してゐる場合。「チアイテース」の例省略。田中美智太郎譯「チアイテース」三三〇頁以下を見よ。次に「ヌムゴシオン」一九三αに分住テアイキスマス(アルカディア人の)のことが言及されてゐる。然るに此の事件は普通三八五／四年とせらるゝから「饗宴」は三八五／四年以後の作となる。此れがドイツ文獻學の創成者ヴォルフ(Platon Gasmahl 1782)以來「饗宴」の代表的註釋本の通説である。(Bury, p. Ixvii; Robin, VIII f. 久保一八九頁)。然しさうすると此の對話篇の背景となつてゐるアガトンの悲劇當選が四一六年(Athen. V, 217 A)である故にプラトーンは時代錯誤を冒してゐることになる。然るにプラトーンはかゝる誤りを他に殆んど冒してゐない故、このディオキスマスは四一七年の事件を指してゐると解すべきであるとの主張が生まれる。即ちヴィラモーヴィッツは *Die Xenophonische Apologie*, Hermes 1897 (36) S. 102, n. 1. に於て(後 Platon II³ S. 176f. に於ても)斯く主張し、バーネット(Phaedo xxxii)此れに讀し、テイラーもその著「プラトーン」の年代表に於てアルカディアの分住を四一八年に上げて、三八五年には掲げてゐない點及びその「饗宴」著作年代觀より見ると同説を取つてゐると考へられる。然しヴィラモーヴィッツの四一七年説は彼の「饗宴」著作年代觀には關係がない、彼は三八一—三七八年としてゐる。然るにバーネットテイラーに於てはこの事は二つの點に於て重大である、一つはプラトーンには時代錯誤は殆んど無い、といふことはプラトーンがリアリスト(著作家として)であること、ひいては彼の對話篇のソークラテースは歴史上のソークラテースを描かんとしたものであるといふことの有力な證據となる點である。

り、もう一つは「饗宴」「パイドーン」「國家」等をアカデーメリア建設(三八七)以前即ち彼の第一回シラクサ行頃には既に完成してゐたとすることに對する有力な反證(三八五ノ四年説が成立すれば「饗宴」はアカデーメリア建設後の作となる)をくつがへしうる點である。(彼等は「ポリテイア」の著作年代を書簡第七より推定する)。この二點はともに彼等のソークラテース及びプラトーン觀の基礎的事項である。然し猶我々(3)以外の證據をも援用すべきであらう。

(4) プラトーンが文人哲學者またはその言葉思想に言及もしくは暗示してゐる場合。「ゴルギアス」とポリュクラテースのソークラテース攻撃書との關係は何れが先きかについて學者間に異論があるが、いづれにしてもポリュクラテースの書の年代が先きに「ヘルギアス」とは獨立に定め得られなければ、證據としては役に立たない。ヱイラモウヱイツは三九三—三八三間(Platon II S. 105)とし他の學者は三九三—二とする (cf. Überweg-Pr. S. 200) さうしてヱイラモウヱイツは「ゴルギアス」の方を先とし、またこの對話篇を旅以前のもつと考へて、その著作年代を三九四—三九〇間と推定する。テイラーも「ゴルギアス」を先とする點ではヱイラモウヱイツに賛成するが、ソークラテースの死後間もなく書かれたものとする(同書一〇三頁)。かくする方がバーネツト・テイラー説には都合がよいのである。此の場合に於ても彼等はヱイラモウヱイツの文獻學的結論を活用して自説を確實ならしめやうと努めてゐる。然しおそらくポリュクラテースの書は三九三—二年であり、さうして「ゴルギアス」はこれに對してプラトーンが引き抜いた一劍であつたのではないか。この對話篇はプラトーンの全著作中稀れに見る殺氣をふくんでゐる。彼はこの一篇を書き残し或ひは書きつゝ海外への旅に出たのではなからうか。ロバン(同書四一頁)は旅直前の作としてゐる。 Hoffman は思想内容(數學・醫學研究の跡、アカデーメリアの教授を願ふ)を理由として三八七以後作としてゐる。然し一般に思想内容を理由とすることについては(6)に述べる。

次に「パルメニデース」「ソピステース」等はメカラ學派批判(少くともそれへの關心)をふくむと考へられる。然るにプラトーンはソークラテースの死後メカラに淹留してゐる。従つて此等の對話篇(及び次の(5)の證據により後者と引き離し得ぬ「デアイテトス」「ポリテイコス」等)はメカラ滞在期頭(少くとも「パイドーン」「饗宴」「國家」よりは以前)の作ではないかと

推測されうる。即ちソクラテス期にメガラ批判期が続き其後プラトーン独自の哲學が建設されたといふ考へ従つてまた時順觀が生まれうる。この考へが最も典型的に現はれてゐるのはアスト(一八一六)の時順觀である。即ちアストは三期に分け、第一期ソクラテス的、「プロータゴラス」「パイドロス」「ゴルギアス」「パイドーン」第二期、辯證的・メガラの、「テアイテトス」「ソピステース」「ポリテイコス」「パルメニデース」「クラテュロス」第三期、純粹學的、ソクラテス・プラトーン的、「ピレエボス」「饗宴」「國家」「ティマイオス」「クリテイアス」となした。然しこの考への萌芽はプラトーンの著作年代順を始めて問題にしたテンネマンに已に現はれてゐる。彼は「ソピステース」「ポリテイコス」を「饗宴」以前の作としソクラテスの死後間もなくメガラで書かれたとし、従つてそれ等より内容上幼いと考へらるゝ「リュシス」「ラケス」「カルミデス」「プロータゴラス」「エウテュデモス」「クラテュロス」等をソクラテス在世中の作とした。(ルトスワウフキエ上掲書三五―六頁による)。此の時順觀の出發は其後メガラ滯留中といふ限定を脱しても、猶種々の形態をとりつゝツェラーに至るまで長らくドイツ學界を支配したのである。その最も重なる點について云へば、「パルメニデース」「ソピステース」「ポリテイコス」を少くとも「パイドーン」「國家」以前の作とすることである。

* ツェラーの時順は前世紀のプラトーン觀を代表する。今その歴史的意義をおもひ、「ギリシヤ人の哲學」最終版(四版一八八九年)の時順を掲げておくことにした。「小ヒツピアス」「リュシス」「カルミデス」「ラケス」「エウテュプロン」「辯明」「クリトーン」「プロータゴラス」「メノーン」「ゴルギアス」「パイドロス」「エウテュデモス」「テアイテトス」「ソピステース」「政治家」「パルメニデース」「饗宴」「パイドーン」「ピレエボス」「國家」「ティマイオス」「クリテイアス」「法律」。彼は其後「テアイテトスの著作年代」についての二論文を始めとし、現在 *Kleine Schriften* 中に所収のプラトーンの關する諸論文を書き、また「綱要」第五版(一八九八)に於て七頁程の増補をなしてゐるが(以後最終版八版まで同頁)然し彼のプラトーン觀は彼の晩年に出版されて(8)言語文獻統計の重要性を學界一般に知らしめ、古典的プラトーン觀の崩壊をもたらしたリツテル(後出)等の書によつていささかも變化を被らなかつた。(「クラテュロス」は十三―十七位の間)。

他方かゝる時順觀に疑ひを抱いた學者は此等の作を偽作と見做すに至つた。即ち後年のユーベルヴェク上述のシャールシユミット等である。(ツエラー四五七註による)。かゝる態度そのものがまたドイツの傳統であつた。(然るにかくの如き傾向をドイツの批判的研究が取りつゝあつた時に英國に於てはグロートがでて前述の如き傳承承認の態度を取り、またフランスに於てもシエニエ(一八七二)が立つてシユライエルマツヘル以來異口同音に偽作とされ來つた諸著作をさへ「クレイトポーン」と書簡集とを除き、ツエラー四四五頁)眞作としたのであつた然し彼等は時順論を斷念した。但しグロートは「法律」を最後の作と見ソークラテースからの距離によつて其他の著作の假想的時順を立てようとしてゐる(「プレート第一卷一九四頁以下」)。ルトスワウスキーはかゝる時順觀を後述の(8)文體統計によつて否定したのみならず、プラトーンのメガラ滯留、メガラ學派とプラトーンとの密接な關係をも彼等の時順觀の禍根と見做して否定した(四二一五〇頁)。然しそれは行きすぎであらう。前者は傳記資料論が後者は本論そのものが説明するであらう。メガラ滯留、メガラ學派との密接な關係の二項目は「パルメニデース」「ソピテース」の時順觀とは別箇に成立し得るのである。

- (5) 一著作の他著作への指示。これには二つの場合を區別しなければならない。(一)はプラトーン自らが此れを行つてゐる場合、(二)我々が讀んで然かく想ふ場合。(二)に際しては慎重でなければならぬ。(一)は已に上述のアストの時順表にも用ゐられてゐるものであり、「テアイテトス」「ソピステース」「ポリテイコス」の順序は同時に時順である。然し「テアイテトス」と「ソピステース」とは必ずしも連続しない。また「國家」(少くともその前半)「テイマイオス」「クリテイアス」の三篇についても同様の事が云へる。其他は皆讀者の推測である。

- (6)(7) 著作の思想内容。藝術性。これは最も根本的なものでありながらまた最も主觀的に傾き易いものである。(6)(7)に對しては我々は充分慎重でなければならぬ。(眞偽觀、時順觀、に於ても明白な誤謬が、かゝる過ちを犯すとは思ひ得ぬ人々によつて犯さるゝのは、多く(6)(7)を證據としてゐる場合である様におもはれる)またこれは箇條書的に書きうる性質のものでもない。この證據は常に特殊的實證的事項を基として現はれるのでなければならぬ。それは固定したものであつてはならない。究極に於ては避けえられぬ證據である。その意味に於ては絶對的なものをふくんでゐると云へる。然しそれはそのものとして固定して主張

することはできない。できうる限りたとへ無味乾燥ではあらうとも科學的客觀的研究を基礎としてゐなければならぬ。

- (8) 言語(文體統計)。文體統計は「劇の年代についての内的證據のうち精密科學的評價を許す唯一のものである」(ダウデン)。人はかかる研究を蔑視する。然し我々は實はかくの如き無數の小研究の成果の上に無意識のうちに立つてゐるのである。たとへばテキストの校訂の如き、すべて同じことである。もとより本末は顛倒されてはならない。「文體研究」の歴史は既に周知のことであらうが、私は此の研究の歴史的意義をおもひ、ルトスワウスキーの研究に従つて出来る限り簡単に(キヤムベル以前を割愛し)辿つておき度いと思ふ。(人名上の番號は同書にあるもの、私は訓期的と思はれる人々のみを番號とともに列擧した) Kキヤムベル(一八六七)は The Sophists and Politicians of Plato. の序文に長い間の研究を壓縮した。その研究はプラトーンの文體研究に於て今猶最も重要なものとせらる。彼によつて文體研究による眞偽、時順の兩問題解決の規準は殆んど確立されたといつてよい。彼は「ソピステース」「ポリテイコス」の眞作性を擁護し、その著作年代を定めやうした。「ソピステース」には他のプラトーンの著作には見出されぬ特殊の用語が多數用ゐられてゐる。そのために屢々偽作視されたが、然しキヤムベルはそれは「ソピステース」に限ることではなく「法律」「テイマイオス」「ポリテイコス」「バイドロス」等にも見出さるる現象であることを見出し、用語の獨異性による「ソピステース」偽作視を斥ける事ができた。此れはアストのプラトーン辭典によつて調べられた。ところがアストの辭典を用ゐてゐる間に「ソピステース」「ポリテイコス」の兩篇には「テイマイオス」「クリテイアス」「法律」(此等はプラトーンの最後の著作と一般に認められてゐた)と共通であるが他の對話篇には見出されない多數の言葉が用ゐられてゐることに氣付いた。また文體から云つても此の五篇には多くの共通點がある。例へば抑揚の均衡、イオニツク與格複數等。かくして彼は此の兩篇の眞作性を確めたと同時に「法律」「テイマイオス」に近い晩年の作なることを信ずるに至つた。彼は更に各々の對話篇について「法律」「テイマイオス」「クリテイアス」とのみ共通な語句の使用數を數へ、その間の類同性を見出さうと試みた。その結果「ビレーボス」は「テイマイオス」「法律」に近く「テアイテートス」「バイドロス」は「國家」とともに「ソピステース」「ポリテイコス」よりは早期の作なることを推定した。N プラス (Attische Beredsamkeit Bd. II, S.

462, 1874) はヒアートウス (二語間の母音連続) が「覆宴」よりは「パイドロス」に稀れであり「ソピステース」「ポリテイコス」「ダレーボス」「テイマイオス」「クリティアス」「法律」に於ては *α, ε, η, ι, κ, λ, π, ρ, σ, τ, υ, φ, χ, ψ, ω* 及び冠詞等の類出語の次にのみ限られてゐて、更に稀れであることを見出し、此處から此等の對話篇が後期作であるといふ、キヤムベルと同じ結論をキヤムベルを知らずに引き出した。これは有名な事項であり、インクラテースの影響とされる。XVII デイツテンベルグ (一八八一) は各對話篇のシノニムの相對的頻出或ひは稀出度の研究をなし、*ε, η, ι, κ, λ, π, ρ, σ, τ, υ, φ, χ, ψ, ω* が *α, β, γ, δ, ε, ζ, η, θ, ι, κ, λ, μ, ν, ξ, ο, π, ρ, σ, τ, υ, φ, χ, ψ, ω* より稀に現はれてゐるのは「ソピステース」(以下同上)等のみ限られてゐる事、其他のシノニムについても類似した事を見出した。XXVII *κ, λ, π, ρ, σ, τ, υ, φ, χ, ψ, ω* リツテルはプラトーンの文體研究について始めて單行本を書いた (*Untersuchung über Platon, 1889*)。さうして「ソピステース」に先立つ一群は「國家」「パイドロス」「テイテトス」よりなるといふキヤムベルの推定に詳細な根拠を與へた。XXII *α, β, γ, δ, ε, ζ, η, θ, ι, κ, λ, μ, ν, ξ, ο, π, ρ, σ, τ, υ, φ, χ, ψ, ω* アルニム (一八九六) もプラトーンの文體の二十六特異點の周到な比較によつて、キヤムベルやリツテルとは獨立に、「ソピステース」(以下同上)等はプラトーンの晩年の作であり、「國家」「パイドロス」「テイテトス」「パルメニデース」がそれに先立つ群なることを認めた。〇ルトスワウスキー (一八九七) 自身は特殊な研究はしなかつたが、先人の業績の中から五百の文體上の特異點に關する研究を選び、これを文體統計法によつて綜合的に、眞作疑ひなき二十二對話篇の時順決定に適用した。その研究に際して彼の用ゐた法則は「同じ著者の、同じ大きさの二つの著作のうち、文體上の特異點をより多く共通に持つてゐる方が、第三の著作に時間上より近い。但しその際それの特異點の重大さの程度が考慮され、觀察される特異點の数が此等三作全體の文體上の性格を決定するに足るだけのものでなければならぬ(一五二頁)といふ「文體類同性の法則」であつた。もとより時間上より近いと云ふことは、著者のどの作かが最後の作であることの獨立した證據がなければ、時間の先後について何の致ふところもない。プラトーンの場合では「法律」がその基準となるわけである(外的證據(I))。かくして彼は後に掲ぐる様な時順を得たのであつた。

然し文體研究による時順決定に對しては種々の疑問が成りたちうる。

(一) 一つはハリカルナツソスのディオニュシオス (前一世紀) 等の言葉による。彼は「プラトーンは自分の對話篇を梳り調べ、あらゆる風に編んで、八十才になつても止めなかつた」(*de compositione verborum. 25*) と云ひ、「ポリテイア」の初めが色々

な風に書きかへられてあるのが死後に見出されたとつけ加へてゐる。ロバンは此れに對して「この證言の眞實性は異論を挟む餘地のないものではなく、また訂正が文體統計の考究してゐる細かな點まで及んでゐたかどうかも疑はしい」と評してゐる。(ロバン、プラトン四〇頁註) D・L III 37には「エウポリオンやパナイテイオスの言によると、國家篇の始めが幾通りにも書き直されてゐるのが見出された」とある。おそらく「國家」の方が傳説であり、ディオニシオスの言はそれからの憶測であらうと考へられる。

(二) 對話篇に出て来る對話者の國籍、年齢、性格、等によつて異同があるので著作の時順には關係ないのではないかとの疑ひが起りうる。特にプラトンの如き巨匠の場合には。この疑ひには既にキャンベルが答へてゐる。

(1) 「ソピステース」「ポリテイコス」「ピレーボス」「テイマイオス」「ノモイ」は文體統計上近似せるものである。それによつて考へて見よう。然るにその主役はエレアの客友、アテーナイのソークラテース、及びクリテイアス、南イタリヤのロクロスの人、テイマイオス等である。また (2) 同じ對話篇の内では、どうしてソークラテース、クリテイアスはテイマイオスの言葉を探用し、アテーナイはエレアの客友の、また若いプロタルコスはソークラテースの言葉を模倣し、クレタ人クレイニアース、スパルタ人メギロスはたいして教育も無いのにアテーナイ人の文體がさう容易に解るのか。(Jowett & Campbell Plato's Republic vol. II essays p. 59)

(三) 只然し文體統計のみから定める事は危険であらう。ことにルトスワウスキーの如く全く數理一方で押し行くのは考へものである。統計は飽くまで數學的でなければならぬが、その適用に際しては數學と生命との差異に常に留意すべきである。

さて、ルトスワスキーの後ヴィラモーヴィツが出で來つて文體統計を採用するとともに、外的及び内的的證據に互る文獻學的研究を綜合集成し、これを原典熟讀による追體驗によつて生命の原姿にまで彫塑し、眞偽、時順問題に一紀元を劃した。「文獻學的研究はヴィラモーヴィツに於て絶對的頂點に達した。」(ホフマン)。然し猶必ずしも學者間に定説があるのではない。私は今後以後の諸學者の時順觀中重なるものを便宜上表となして次に掲げて見よう。

諸家時順表

Apology	Ion	Ion	Apolog.	Hipp. I	Ion
Euthyph.	Hipp. II	Hipp. II	Kriton	Hipp. II	Hipp. II
Crito	Protag.	Protag.	+Ion	Ion	Protag.
Charmid.	Apolog.	Laches	Protag.	Menexen.	Apolog.
Laches	Kriton	Lysis	Laches	Charmid.	Criton
Protag.	Laches	Charmid.	Charmid.	Laches	Euthyph.
Meno	Lysis	Apolog.	Staat I	Lysis	Lachès
Euthyd.	Charmid.	Kriton	Euthyph.	Cratyl.	Charm.
Gorgias	Euthyph.	Euthyph.	Lysis	Euthyd.	Lysis
Cratyl.	Thrasym.	(Thrasym.)	Gorgias	Gorgias	Thrasym.
Symp.	Gorgias	Gorgias	Menon	Menon	Gorgias
Phaedo	Menexen.	Menexen.	Euthyd.	{ Euthyp. } { Apolog. } { Crito }	Ménexén.
Republ.	Menon	Euthyd.	k.u.+g.Hip.		Ménon
Phaedr.	Kratyl.	Menon	Kratyl.	Phaedo	Euthyd.
Theaet.	Euthyd.	Kratyl.	+Menexen.	Sympos.	Cratyl.
Parmen.	Phaidon	Sympos.	Sympos.	Phaidon	Phédon
Sophist	Sympos.	Phaidon	Phaidon	Protag.	Banquet
Politic.	Staat	Republ.	Staat	Republ.	Républ.
Phileb.	Phaidr.	Phaidr.	Phaidr.	Phaedr.	Phèdre
Timaeus	Parmen.	Parmen.	Theaetet.	Theaetet.	Théétèt.
Critias	Theaetet.	Theaetet.	Parmen.	Parmen.	Parmén.
Laws	Sophist.	Sophist.	Sophist.	Sophist	Sophist.
	Politik.	Politik.	Politik.	Politic.	Politiq.
	Timaios	Phileb.	Timaios	Phileb.	Timée
	Kritias	Timaios	Kritias	Timaios	Critias
	Phileb.	Kritias	Nomoi	Laws	Philèbe
	Gesetze	Nomoi	+Epinom.	Epinom.	Lois
Lutoslawski (1897)	Wilamowitz (1913)	Hoffmann (1922)	Praechter (1926)	Taylor (1926)	Robin (1935)

+疑作

一は時代區劃。…はソークラテースの死。第一回シラクサ行。第二回同上。第三回同上。を示す。○ロバン表に最後の…が無いのは、彼の時順論にはそれに就いての所説が見出されないからである。

ロバンはなほ「大ヒツピアス」「アルキピアデース第一」をも眞作と認めてゐる。然しそれ等の時順についての彼の考へは不明である。○テイアー表の上半部特に「マキロギア」等は必ずしも時順を示さない。○諸家表中「トラシユマユス」とあるは「國家」の第一卷を指す。デュムラーの命名 (Raeder, Patons philosophische Entwicklung S. 203. cf. Zeller-Hoffmann S. 1056. 3)。

猶他にも掲ぐべき高名な學者の時順表があるが餘り多くなりすぎるので割愛する。そのうちシユテンツェルは大體の群に分類するだけで「リュシス」「スユムボシオン」と「メノーン」「ユルギアス」「パイドーン」とが「國家」に於て頂點に達し、「國家」以後存在論的對話篇の系列が「テアイテトス」「ソピステース」「ポリテイコス」に始まり「パルメニデース」「ピレーボース」「テイマイオス」に於て絶頂に達する。「パルメニデス」より「ソピステース」が、「ピレーボス」より「テイマイオス」が前ではあり得ぬかを決定することは哲學的考察の課題ではないとすむ。(Stenzel: Metaphysik des Altertums. 1931, S. 106f.)。

以上諸家の研究を比較検討し、上述の規準を基として私は次の様な表を暫定的に作つて見た。
この表については種々の異論もあるであらうが、個々の著作については本論にゆづり、今はそのうち特に問題となる諸項について簡単に述べておかう。

プラトーン 著作年表 (前四二七生)

青年時代 (二〇一四〇)

- イオーン
 ◎小ヒツピアース
 (ソークラテースの死三九九)
 ○アポロギア
 クリトーン
 ラケース
 リユースイス
 カルミデース
 エウテュプローン
 ●(トラスユマコス)
 ○プロータゴラス
 ◎コルギアース
 (三九〇—三八八頃旅、第一回シラ)
 (クサ行、デイオーンと知る)

壯年時代 (四〇一六〇)

- メネクセノス
 (アカデーメイアに學園建設三八七頃)
 ◎メノーン
 エウテュデーモス
 クラテュロス
 ●パイドーン
 ◎スユムボシオン
 ●ポリーテイア(三八〇—三七〇頃)
 (テアイテートス戦病死三六九)
 ○テアイテートス
 (アリストテレース入門三六七)
 パルメニデース

老年時代 (六〇一八〇)

- (第二回シラクサ行三六六一五)
 ◎パイドロス
 ソピステース
 ポリーテイコス
 (第三回シラクサ行三六一一六〇)
 ●テイーマイオス
 クリテイアース
 (エウドクソスの死三五四ノ五)
 ○ピレーボス
 (デイオーンの死三五四)
 第七書簡
 ●ノモイ
 (プラトーン死三四七)

表中にあるものはすべて、程度の相違はあるが、眞作と考へらるゝもの。中にあつて●は絶對的に權實と考へられ◎と共に基本著作となるもの、○も印なきものよりは眞作性高きことを示す。

(未完)